

TENOHASI

てのはし／地球と隣のはっぴい空間池袋 会報誌第44号 2023年9月20日発行



昨年4月、461人が並ばれた炊き出し風景。やがて600人を超えるとは、この時はまだ想像もしていませんでした。

- 2 コロナが収束しても生活困窮の波が終わらない
- 4 会計報告 寄付が急減・今年度は大幅赤字？
- 5 当事者インタビュー 池袋のレジェンド・Aさんに聞く
- 8 2022年度活動報告 炊き出し・夜回り・生活相談・鍼灸・他
- 17 コラム TENOHASI 働き方改革！
- 18 あなたはどうして炊き出しボランティアに？
- 20 新職員自己紹介
- 22 ご寄付ありがとうございました

コロナが終わっても 生活困窮の波が終わらない

コロナ禍4年目の報告

炊き出し利用者の増加

5月に新型コロナウイルスが5類に移行し、生活は徐々にコロナ前に戻りつつあります。しかし、炊き出しに並ぶ人の増加が止まりません。

次ページのグラフからわかる通り、2020年にコロナ禍が始まってから炊き出しに並ぶ人はどんどん増えました。今年1月に初めて600人を超え、その後も天気が良ければ550人を超えるという状況が続いています。

それまで私たちは、炊き出しに並ぶ人数の急増はコロナ禍によるもので、コロナが収まれば減少すると思い、その時を心待ちにしていました。人数が減れば炊き出しの運営もシンプルになるし、何よりもお弁当にかかる経費を減らすことができます（一食500円、五五〇食で27万五千円です）。しかしまだ「その時」は訪れていません。

炊き出し利用者アンケート

では、いまの炊き出しに並んでいるのはどんな人なのか、どんなニーズがあるのかを探るために、六月から七月にかけて小規模ながらアンケートをとってみました。聞き取りをしたのは順天堂大学医学部武田裕子ゼミや日弁連の皆さんなど。答えてくださった炊き出し利用者は38人。年齢は30歳から88歳、性別は男性27人、女性6人、未回答5人でした。

コロナ禍が収まってきてから並んだ人が7割

「炊き出しに初めて並べたのはいつですか」という質問に対して、「コロナ禍が始まって以降」と答えた方が23人で約7割でした。この間の人数の増加を見ればその通りでしょう。

予想外だったのは「ここ1年以内」と答えた方が18人で約5割を占めたことです。コロナ禍は徐々に収まってき

たのに、その時になってはじめて並んだ人が現在の利用者のかなりの割合を占めていることがわかりました。コロナ禍で進んだ貧困は、コロナ禍が収まってきた現在もボディブローのように人々にダメージを与えているということでしょう。もちろん、何回か炊き出しに並んだけれど仕事が回復するなどして並ばなくなったという方も多く、いま並んでいる方もいくつかは必要なくなるかもしれません。問題なのは「炊き出しを必要とする人が今も新たに生まれている」。「そのために人数が高止まりしている」ことで、求人倍率などが改善してもその恩恵を受けられない人がたくさんいると言うことです。

逆にコロナ禍以前から炊き出しにいらしていたと答えた方は約3割でした。これは現在の炊き出しに並ぶ人の約3割に約170人という人数が、コロナ前の2019年に炊き出しに並んだ人の平均166人とほぼ一致すること

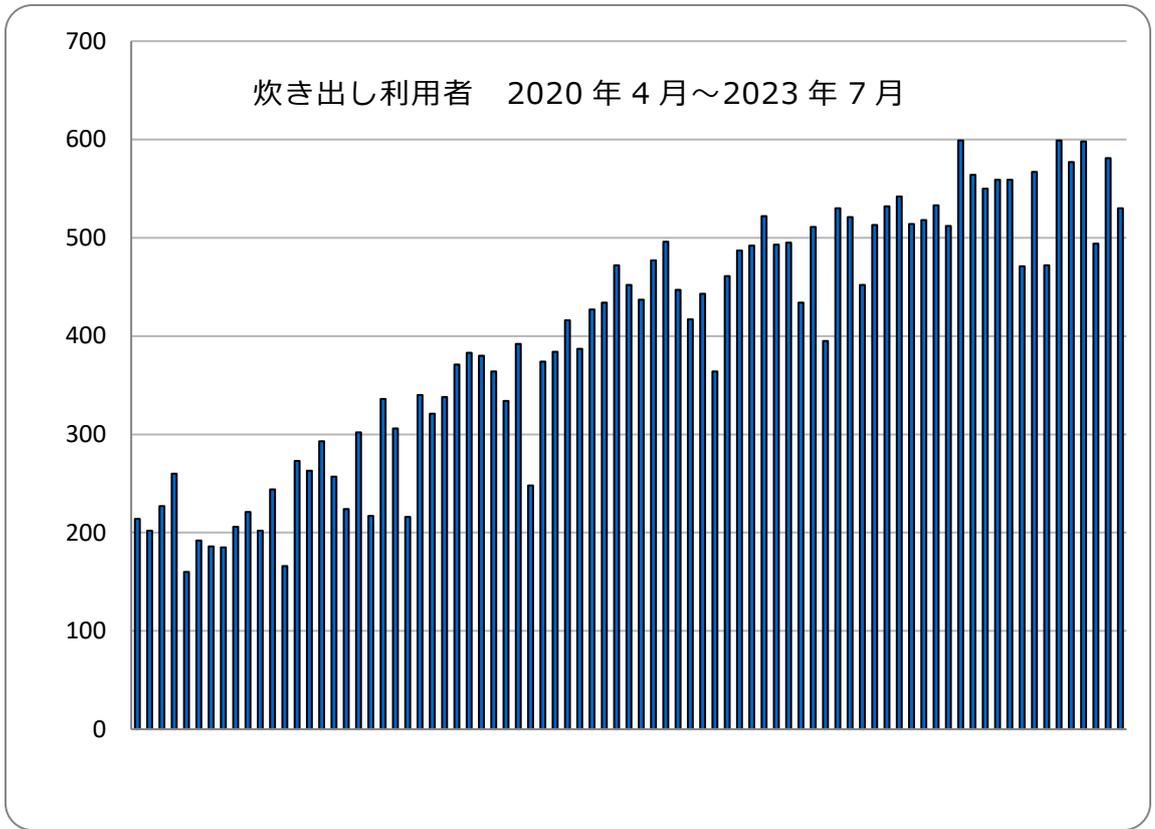
と、コロナ前に出していた「ぶっかけ飯（汁かけご飯）」を食べたことなどから、全体を反映していると思われる。

家のある方が多数

お弁当をどこで食べますか、という質問に対しては「家」と答えた人が28人で約9割、公園・バス停・橋の下など「家がない」と思われる方は4人で約1割でした。コロナ前は「ホームレス状態の人とその卒業生」中心でしたが、今は「家はある。でも炊き出しに並ばないといけない」人が大多数を占めています。（ただし、若い学生さんらに聞かれて思わず「家」と答えたけれど実はネカフェ生活や野宿の方もいるかも知れないと思います）

「家があるのに炊き出しに来るなんて甘えているのでは」と考える方もいらっしゃるかも知れません。

炊き出し利用者 2020年4月～2023年7月



しかし、たとえばこんな方がいらっしやいます

「高齢の両親と暮らしパートで働く30代女性は、受け取った弁当を親と分けて食べて

いるといいます。『いまは私のパート代と親の年金でなんとか暮らせています。でもこの先、いつリストラされるかわからない。今後、高齢の親の介護もあるかもしれない。毎日、不安でビクビクしながら生きています』と話してくれました」

「炊き出し」並ぶ人は3年前の2倍に若者も 東京池袋「NHK」2023年1月21日

この方のように、コロナ禍だけでなく労働環境、障害、高齢・病気など様々な困難を抱えて一人孤独に耐えている方が多いことは生活相談でも実感します。

そのような方々がお弁当を受け取って少しでもホッとして、次に進むための力を蓄えることができているなら、お弁当の配布を続ける意義はあると思います。

清野賢司

会計報告 寄付急減・今年度は大幅赤字？

みなさま、いつもご支援ありがとうございます。2022年度のてのはし会計について報告いたします。

○収入

2022年度の寄付金収入は約3400万円、前年の年より約2100万円（約4割）減少しました。

それまでの2年間は、コロナ禍で一気にマスコミの注目を浴びたことから、2020年度約4900万円、2021年度5500万円の寄付金収入がありました。しかしコロナが収まってくるに従って、テレビや新聞に取り上げられる回数は急減し、寄付金も急減しました。この減少ペースだと今年度の収入は2000万円以下になることが予想されます。

○支出

2022年度の支出は約3500万円で、史上最高額になりました。炊き出しに並ぶ人が増えて経費がコロナ前の10倍になったこと、シェルターを増やし（コロナ前の6部屋から現在25部屋）、職員も増やした（1人から、非常勤含め5人に）ことが主な要因です。

○今後に向けて

2022年度は単年度では約140万円の赤字となりました。預金がおかげさまで7200万円あるので当分は活動を維持できます。しかし今後を予測すると、2023年度が収入2000万円・支出3500万円で赤字1500万円となり、これが5年続けば預金はすべて消えます。

2022年度 会計報告

前期繰越		73,545,220	
収入	正会員会費	12,000	
	寄付金	33,049,663	
	助成金	500,000	
	利息他雑収益	66,046	
	合計	33,627,709	
支出	炊き出し	弁当・飲料・消耗品等	9,910,471
	車両費		786,138
	夜回り	食材・消耗品等	907,114
	生活支援費	食品・宿泊費等	2,292,383
	家賃	シェルター・事務所家賃	2,817,000
	シェルター光熱水通信費		155,262
	印刷費		255,884
	事業人件費	支援員人件費	8,207,402
	旅費交通費		535,151
	事務費管理費	会報誌・通信費・手数料・管理人件費等	9,121,334
	合計		34,988,139
単年度差し引き合計		-1,360,430	
次期繰越		72,184,790	

経費の節減が必要ですが、炊き出しに並ぶ人が減らず、相談者も減らない現状では削

減にも限界があります。どうかご支援をよろしく願います。

当事者インタビュー

池袋のレジェンド

Aさんに聞く

た。今回は、ここに至るまでの豊富な人生経験についてお話をうかがいました。

—Aさん、ご出身は千葉県でしたよね？

そうですね。中学卒業まで地元で暮らしました。それから、自立したいと思って東京へ出て、定時制高校に通いながら、自動車の部品を作る会社で機械工をしていました。従業員は三百人くらいいました。そこでは八年ほど勤めました。

—それから千葉に戻って、転職されたとか？

ええ、金型製造の会社に就職したのですが、その頃は体調が良くなくて会社を休むことも多かったのですが仕事は続けていました。ところが弟が三十代でなくなり、葬式を終えて家に帰って三日目に、今度は父親が倒れ、救急隊が来た時には間に合わず、亡くなってしまったんです。

—いつ頃に弟さんとお父さんがお亡くなりになったんですか。大変でしたね。

それだけでなく、今度は母親の具合が悪くなり、その介護もあった。会社を辞めることになりました。

その時、生活保護の申請をしようと思ったんですが、当時は家があるからと認めてもらえませんでした（本来は持ち家があっても困窮していれば生活保護は利用できる）。二カ月の入院で大変な額の治療費の請求が来たんですが、それだけは役所の方で何とかしてくれたいですね。そんな生活が三年くらい続き、自分も鬱のような状態というか、いろいろなことに集中できなくなってしまう、歯車がずれてしまった感じですね。

—それからどうされましたか？

母親を見送り一人になった時点で、治療費とかもあって家も処分してアパートで暮らしたんですが、不調が続くそれも失い：

—たしか妹さんがいらっしやいましたね？

妹はもう所帯を持って別に暮らしていたんで、迷惑かけたくないと思って、一度、自分のことは心

配しないでいいと連絡しました。それ以来音信不通ですね。

—それから東京に出られたんですね？

貯金も使い果たし、東京駅の下街で寝ていたら手配師に声をかけられました。住み込みで実働一五日の契約、つまり一五日働かないと給料がもらえない。給料から部屋代・食費等が引かれるから、休みが多いと手元にあまり残らない。でも、そこに二年くらいいる間に仕事を覚え、精神的にも落ち着いてきて、生きる望みというか、何とかしなければという感覚が出てきたんですね。

—で、そこを出られたんですね？

ええ、（当時は）建築・土木の仕事は住所とか生年月日とか聞かれないから、自分で探した方がいいと聞き、四十代前半くらいの方に他の場所に移動しましたね。そこで出会った手配師の方が良心的だったんで、その仕事に行きながら、お金が無くなるもほかのホームレスの人たちに交じって駅の構内とか銀行の前とかで寝ていました。

でも、今と違ってその頃のいわゆる「ホームレス」という人たちは汚れた服を着て、生きる望みを失くしたような人がかなりいたんです。それを見たとき、ショックだったし、自分が立ち直るきっかけにもなりました。

ーそこでAさんは変わられた…

その頃、新宿連絡会(新宿の支援団体)を手伝っている仲間がいて、自分も一緒に活動するようになりました。そのうちに、他でもやろうという話になって、いろいろな活動に取り組みようになりました。

ー具体的にはどんな活動をされていたんですか？

例えば、自立支援センターに面会に行つて困りごとの相談を受け、行政と改善に向けて話をしましたね。月に一回程度、手伝っている人たちの集まり(懇談会)を持ち、出された意見について、できることは変えていこうと相談もしました。

あとは、てのはしの皆さんがやっているような夜のパトロールですね。毎週回って声掛けをして、具

合が悪かったら病院に行けるから、月曜に役所に行くようにと話しました。朝イチで行くと支援者が待っていて、一緒に役所と話をしてくれましたね。

ー特に印象に残っていることかありましたか？

自立支援センターに三か月いて就職し、アパートに入って独立した人がいたんですが、自分が駅で寝ていた時声に「あの時は助かったよ」と声を掛けてくれ、「寒いだろ」とコートを持ってきてくれて、給料が出たからと五千円くれたことがありました。「何もやってくれない」という文句を言う人も多かったですけど、百何十人も入っているんだから、こちらができませんか。だから、その時は嬉しかったですね。

池袋の炊き出しをやりましたのも我々です。20年くらい前で、てのはしができる前です。公園でご飯を炊いて四百食以上出していましたね。米が悪いから、研いでいるとくずれるし、コクゾウムシもいっぱいいるようなのでした。大きな寸胴二つで汁を作りました

が、温かいからおいしかったですよ。でも、予算が一回七千円しかないのでも苦労しました。



ーお話をうかがっていると路上生活をしている人が、自立支援センターという、仮にも屋根のある所に住んでいる人を支援するって不思議な感じがするんですが…

自立支援センターにいる人も路上にいた人だし、自分は金がないなれば仕事に行くから、金がない状況っていうのは作らなかつたんですよ。

路上の人でも仕事に行かない人(働けない人)がいるので、建築の仕事をかか月やれば、たばこ代と

かコーヒー代くらいは出してあげられました。路上生活三十年のうち、半分くらいは働いていましたからね。

ーAさんはそうやって助け合いながら路上生活をされてきたわけですね。冷え性の私には考えられないのですが、冬の寒さをしのぐ生活の知恵みたいなものをお聞きできれば…

寝袋は必需品ですね。冬はダブルで、寒ければカイロを足のほうに入れます。段ボールを三枚、四枚敷いて下からの冷えを防ぎ、それでも寒い場合は同じサイズの箱を三つ繋げて、頭の部分に一つ、全部で四つの箱を繋げてガムテープで貼るとかなり寒さをしのげます。15分もかけずできますけど、段ボールの保管場所には苦労しますね。

ー夏のご苦労は？

夏は蚊に苦労しますね。ですからみんな殺虫剤を欲しがっているわけですが、これが刺される人と刺されない人といえるんですよ。

ー確かに…。

そういう路上生活をされているみなさんと私たちは夜回りでお会いするんですが、昼間はとうきょれているんでしょうか？

昼は炊き出しに行く人が多いですね。あとは段ボール手帳(公園の清掃など)の仕事に行く人もいれば、夜熟睡できないのでデパートの休憩場所などで仮眠をとる人もいます。金曜・土曜は並びの仕事(バイヤーから依頼されて家電などの特売品を手に入れるために早朝から並ぶ)もあります。が、昔と比べて今は少なくなっていますね。業者もですが、ホームレスの人に身分証明書とか携帯を求め、排除していく傾向があるようです。

私も炊き出しや並びもやりました。暖かい公園で話をしたりしていると炊き出しとかの情報交換もできますね。

ー炊き出しはどんなところを回られましたか？

錦糸町、新宿、代々木、上野、全部歩きで回りましたね。

ー上野は聞いたことがあります。が、錦糸町まで歩いて行くというのは想像できません！

さて、では、アパートに入居されるまでのお話をうかがうんですが、きっかけはご病気でしたよね？

去年4月の夜、具合が悪くなって救急車を呼んでもらって、病院で治療してもらい、一旦路上に戻りました。その時の医者は明日また来てと言ってくれていて、救急隊から役所にも連絡が行ったはずですが、翌日病院に行ったら予約が入ってないと言われたので、役所に戻り、他の病院を探してもらい治療を受けました。

ーそれから生活保護の申請をされたんですね。

施設に入ってもらわないと治療が継続できないと言われた承しましたが、その従業員の対応がひどく、ケースワーカーに話して別の施設に変えてもらいました。その後、清野さんに事情を話し、シェルター待ちの希望を伝えたところ、一週間ぐらいでシェルターが空いて入居することができました。



ーシェルターに入られてどうでしたか？

何より、一人部屋というのが良かったです。暖房も利くし、十分きれいですが、夜中にトイレを使うと凄い音がするので気を遣いました。

ーそこで住民登録をされ、マイナンバーカードも作られてアパートに移られました。ご自分の部屋で何日か過ごされてどうですか？

ゆったりできるのがいいですね。欲を言えば陽当たりが良ければと思いますが、設備に関しては問題ないし、十分生活していけます。夏場に向かって大きい冷蔵庫が欲しいですね。

いろいろ高くなっているのでも節約のため炊き出しに行つて、食料もストックして生活しています。電気代がどのくらいかかるかがちよつと心配ですが、シェルターに長くいた分、貯蓄もできたから大丈夫でしょう。

ー最後にシェルターとアパートの違いについて聞かせてください。

やっぱりシェルターは寮だと思ふんですよね。ある程度自分を抑えて、きれいに使い、アパートに入つて自立するための練習をする場所だという感覚でした。

アパートに入ると責任がかかってきますよね。支払いや部屋の管理、周りの人との融合、それに気をつけないといけないと思つています。

ーAさんなら全く心配ないですよ。今日は興味深いお話をありがとうございました。

インタビュー 高橋秀子



2022年度

TENOHASI 活動報告

炊き出し

1. 炊き出しに並ぶ人の増加と変化

最初のページにもありますが、未だ炊き出しに並ぶ人の増加が止まりません。コロナ禍が始まった2020年に200人を超え、2021年1月に300人、9月に400人、2022年5月に500人、2023年2月には600人を超えました。

また、並ぶ人の層も変化しています。昨年にも増して女性や若者が多く並ぶようになりました。スマホ片手に並ぶ若者、スーツ姿で並ぶ30代と見られる方、子連れの親などが並ぶ姿をよく見るようになりました。仕事や居場所を失った人、またはそういう状況に近い人達が集まっているのだと思います。単に路上生活者というカテゴリーだけではなく、困っている人の層が多様化しているように思います。

2. 炊き出しでお弁当配布



コロナ禍以前まで行っていた「ぶっかけ(汁かけ飯)は、密を避けるため2020年から持ち帰り弁当に切り替えました。お弁当は「つるや庚申塚店」に発注しています。大盛りの白米とポリューム満点のおかずが入ったお弁当を廉価で提供して下さっています。

また、パルスシステムが毎回野菜や果物、パンなどを無償で提供してくださっています。

その他、大塚モスクさん提供のビリヤニ、各地から寄付されたアルファ化米、飲み物も配ります。

ます。炊き出し当日はお弁当の入った袋を含め2〜3袋を持ち帰っていただいています。



3. 配食方法の変更

炊き出しに来た人が密にならないよう、また、滞在時間を短縮できるように工夫を重ねてきました。

並ぶ人の間隔を開けるためにテープやロープで目印をつけています。

割り込みやトラブルの防止、スムーズな移動をもらうように整理誘導班を組織しました。お弁当を公園内で食べると

密になるので、食べようとする人を注意する役割もあります。

弁当・パンその他の食品はあらかじめスタッフが袋詰めをしてから渡しています。600人が来ても約30分で配ることができるとなりました。

2023年5月から新型コロナウイルスが5類感染症に移行しました。行動制限や外出自粛は緩和されていますが、炊き出しでは引き続き十分にコロナ対策に留意しながら活動を実施しています。

4. 並ぶのが難しい人コーナーの設置

「暗い公園で男性ばかりの中に並ぶのが怖い」「公園まで来たが列に並ぶのが怖くて帰ってしまっただ」。そういった女性の声がありました。そこで設置しました。並ぶのが難しい人コーナーには椅子とライトを置いています。精神的に並ぶのが困難な人、身体的に立って並ぶのが難しい人にも利用していただいています。順

番が優先されると勘違いされる方もいらっしゃるため、随時説明しながら行っています。



5. 衣類配布

利用者が激増したため、炊き出しと分離して毎月第一土曜日の午前中に衣類配布を行っています。毎回約120人が並べられます。

女性ものコーナーを設置し、必要なものにわかりやすくたどり着くようにしています。また、衣類だけでなくカミソリ、石鹸、タオルなどを置く日用品コーナーも設置しています。

炊き出しでは配れない賞味期限切れの保存食も配っています。期限切れであることを伝えながら必要な方にお渡ししています。夏場には熱中症対策として冷たい飲み物を配る時もあります。



6. 運営体制

配食、整理誘導などの各班のリーダーで、炊き出しの運営を担う「炊き出し運営グループ」(現在12人)を組織しています。毎回の準備、実施、反省を行っています。このグループから様々なアイデアが提案され、

日々、より良い活動となるように心がけています。

炊き出しボランティアが登録するライングループは現在約200人が参加しています。1回の炊き出しを行うのに必要なスタッフは約40人です。準備から撤収作業まで様々な役割を分担するので、綿密な計画が必要です。当日参加するスタッフの募集、シフト原案作成、そして炊き出し運営グループで検討し参加者に案内をしています。

初参加者は1回4人(現在は8人)を募集しています。学生の体験学習としての参加も受け入れています。

8. 課題

新型コロナウイルスが収束に向かうかと思われた中、炊き出しに並ぶ人数は減少しています。毎回のよう公園外へ列が伸びてしまっています。炊き出しに並ぶ人の減少は訪れるのでしょうか。

大野力

夜回り

活動の概要

毎週水曜日の21時半から、池袋駅及びその周辺で路上生活状態にある方々への寝床訪問(夜回り・アウトリーチ)とおにぎり配りを行っています。



夜回りで出会う人々

夜回りでは池袋駅2コース(有楽町コース・いけふくろうコース)、西口、東口、椎名町

駅の各コースに分かれて、寝床を訪問します。お一人お一人におにぎり、パンとともに、炊き出しや支援の情報をまとめたチラシをお渡しします。2022年度は平均41名にお会いしました。コース別の平均は池袋駅19名、西口2名、東口が16名、椎名町が3名となっております。

おにぎり配り

夜回りに出発する前に、池袋駅前公園(通称:うなぎ公園)に並ばれている方々におにぎりやパンなどをお渡ししています。2022年度は平均68人の方がおにぎりを受け取られました。

配布するおにぎりやパン

おにぎりは夜回り当日にピアメンバー(路上生活経験者)とボランティアとで、毎回約130個を作っています。パンは連携している要町の「要町あさやけベーカリー」でピアメンバーも参加して、月に2回、毎回約100個のパンを提供してくれています。



また、豊島区の社会福祉法人フロンティア「いけぶくろの里」より毎回約100個のパンの提供を受けています。

月に1回、赤羽にある“New Nene's Kitchen”からフイリピン弁当約70食の提供を受けています。

さらに東久留米市にある私立自由学園の中高生の自主サークル「つなげる輪」が月に1回約140個のおにぎりを握って自分たちで配布してくれています。

夜回り・おにぎり配りにおける生活相談

夜回り・おにぎり配りでは1年間で49件のご相談をお受けしました。そのうち16人に生活保護の申請同行、6人に自立支援センター板橋寮の利用申請同行を行いました。

また、4人が夜回り・おにぎり配りでの相談をきっかけにシエルト入居となりました。

今まで、夜回りでお会いする方のご相談と、おにぎり配りでお受けするご相談の数を区別することなく集計していましたが、夜回りはこちらからお声がけをする形でご相談がはじまり、おにぎり配りは相談を目的に来られる方と、それぞれ相談につながる経緯が異なることから、2023年度よりおにぎり配りと夜回りでの相談の数は分けてご報告できるよう準備を進めてまいります。

幸田良佑



ほっと友の会（お茶会）

★活動

いつもであれば、第4土曜の炊き出しの日に、公園内にダンボールを敷いて輪になって座り、コーヒーや手作りのお菓子を食べ、歌を歌い、そして場が暖まった後、落ち着いた雰囲気の中で話し合います。

しかし、新型コロナウイルス感染症状況から、現在は休会しています。新型コロナウイルスは5類感染症に移行しましたが、感染状況やその影響力はまだ厳しいものがあります。まだ休会を続けますが、以前とは異なる形だとしても、いずれ公園でほっと友の会の活動を再開し、みなさまと語り合える時間がくることを願っています。

稲見得則



生活相談



①相談者のプロフィール

炊き出し・夜回りでの生活相談に2022年度は337人(実数)がいらっしゃいました。前年度より若干減少したものの、コロナ前と比べると約2.5倍で、あいからずの高水準です。

相談者の平均年齢は約51歳で前年とほぼ変わらず。

女性の相談者は42人で前年と全く同数、全体に占める割合は12%でした。

相談につながった窓口は、炊き出しが約70%。夜回りが約20%。電話やメールからの相談が約10%。やはり炊き出しが一番大きな相談の機会となっています。

相談内容は多岐にわたります。特徴的なケースを挙げる
と…

(プライバシー保護のために一部書き換えています)

1. コロナ禍で困窮

・30代男性

フリーランスでイベント企画の仕事をしてきましたがコロナで全滅。コロナが収束するまでは頑張ろうと給付金・日払い仕事と借金で生活してきましたが、先行きの不安と思うように仕事ができないストレスから精神疾患に。アパートも退去して路

上生活になってしまいました。

・50代男性

派遣で働いてきましたがコロナの影響で仕事が減りシフトに入れなくなりました。社協の緊急小口・総合支援資金の貸付を利用して何とか凌いで来ましたが、期限がきて収入が途絶え、アパートを追い出されホームレスに。

○解説：フリーランスや派遣の仕事がコロナが直撃して仕事を失い、試行錯誤の末に困窮した方が目立ちました。2022年は徐々にコロナが収まってきた1年でしたが、メンタルに打撃を受けるなど影響は今も続いています。

2. バーンアウト

・50代女性

貿易会社で派遣社員でしたが認められて正社員になりました。すると仕事が激増し、さらにコロナでテレワークになり、ア

パートにこもる生活に。やがて鬱病になって出勤できなくなり、有休を消化後、退職。トラックルームに荷物を預け、ネットカフェ生活。持ち物を持って生活しましたが、お金がたりないときはこっそりトラックルームに入り込んで寝ました。

・50代男性

○〇(誰もが知っている有名企業)の社員でした。過労死ラインを超える程残業していましたが、仕事ができない自分が悪いと思い、残業の申請もしませんでした。やがて鬱病になって会社に行けなくなり無断欠勤。家賃滞納で部屋を出ました。もう死のうと思つて富士の樹海に行きましたが死にきれなかった自分が情けないとおっしゃいます。

○解説：コロナの影響もあり、過酷な仕事でバーンアウトして困窮した方も目立ちました。また、自死しようとして果たせなかったという方が特に多い1年

でした。「死ぬのはいつでもできますから、とりあえず先延ばしにしましょう」と話して次のステップに進むことをおすすめしています。

3、依存症

・40代男性

正社員でしたが、ギャンブル依存症で借金がかさみ、アパートを家賃滞納で失ってホームレスになりました。退職金で借金の一部を返しましたがまだ数百万円残っています。

○解説：コロナ前からですが、アルコールやギャンブル・ネットなどの依存症で困窮された方の相談も多いです。金銭管理が一番大きな課題ですが、自己コントロール不能な欲求に抗うのは容易なことではなく、一時的に回復してもまた困窮される場合もあります。

4、隣人騒音・隣人トラブル

・50代男性

昨年、〇〇区の生活保護で路上生活からアパートに入りました。しかし周囲からの音が気になって眠れなくなり、アパートから飛び出してしまいました。福祉事務所に相談したら施設に入れと言われましたが、施設の集団生活には耐えられないです。

○解説：音に敏感なために隣人騒音に苦しんで家を出たというケースがこの年は特に目立ちました。東京の住宅事情では隣人騒音は避けられないのですが、過去のつらい体験がフラッシュバックして部屋にいられなくなるのは本人にもどうしようもなく、悩まれています。

5、流動層？

・40代女性

精神障害があり、あちこちを放浪していました。直近は関西で生活保護を受けて障害者のグ

ループホームで生活していましたが、でも職員の対応が冷たくて住み続けるのが辛くなり、発作的にとびだして、以前相談したことがあるてのはしを頼って東京に来ました。

・60代男性

10年以上、新宿や池袋で路上生活しながら日払いの仕事をしていました。その後生活保護を受けてアパートに入りましたが、「なんとなく」不安になり、アパートを退去して再び路上生活になりました。

○解説：流動層とも呼べるこれらの方々は、日雇い労働が長い男性と、精神障害のある男女の二種類のタイプに分けられるように思います。なぜ放浪するのか、どうしたら定着できるか、はたまた放浪のほうがその人らしい生き方なのか、悩みます。
*これらは相談者のほんの一部です。

②相談者への支援は

生活保護申請同行 71人
自立支援センター申請の同行 14人
就労支援 2人

生活保護・自立支援センター申請同行は前の年度とほとんど変わらず。就労支援が11人から2人に減ったのが特徴的です。コロナが収まってきて、一部では人手不足と言われるなか、仕事ができる人はすでに働いているものと思われれます。

清野賢司



シェルターの運営とハウジングファースト東京プロジェクト

① ハウジングファースト

東京都とその隣県では、家のない人が生活保護を申請すると、当面の宿泊先として民間経営の宿泊所に案内されるのが通例となっており、コロナ禍でどこも一杯という状況が続いています。良心的な宿泊所もあると聞いて居ますが、多くは貧困ビジネスと言われるようなところです。

行政の指導で相部屋形式の宿泊所は減り、2023年4月からは個室でなければ認められなくなりました。しかし、トイレ風呂は共同、食事が2食提供されるが食べても食べなくても食費は取られ、利用料を支払うと手元に残る生活保護費が2〜3万円だけというところがほとんどです。

大手の宿泊所の中には上野や新宿・池袋に「手配師」と呼ばれるリクルーターを派遣して路上生活者を言葉巧みに勧誘し、入居させて生活保護を申請させ、利用料を取るというところもあります。

また、最近では郊外のアパートやマンションで入居者が集まらない不人気物件を安く買い取り、路上生活者を勧誘して入居させて生活保護の住宅扶助費を超える高額な家賃を取り、物件の利回りを上げて事情を知らない第三者に高値で売り抜けるという新手法の貧困ビジネスも出現し、テレビや新聞で報道されています。

そのような貧困ビジネスから逃げてきた相談者はとても多く「あんな生活はもう無理」とおっしゃいます。

税金から生活保護費が出ているのに、利用者がどこか堪え忍ばなければならぬこの仕組みはどう考えてもおかしい。私たちは、最初から普通のアパートやマンションで生活し、そこから次のステップに向かう「ハウジングファースト」を日本の福祉に定着させるための実験的なプロジェクト「ハウジングファースト



東京プロジェクト」を2016年から行っています。

プロジェクトは現在6つの団体（世界の医療団・つくろい東京ファンド・訪問看護ステーションフローカ・ゆうりんクリニック・habitat for Humanity・てのはし）で構成されて、相談・住まい・医療・日中の活動など生活全般を支える支援を行っています。

② シェルター

そのなかで一番大切な支援が、路上から直接入居できる普通のアパートⅡシェルターです。路上から直に普通のアパートに入居して頂き、そこで一人暮らしのためのさまざまな準備をして数ヶ月後には自分で契約した住宅に転宅することを目指します。

2022年は連携団体のつくろい東京ファンドとともに

23室のシェルターを運営しました。



2022年度のシェルター利用者は32人（利用中の方を除く）。そのうち27人がご自分のアパートに転宅。前年の24人からさらに増えました。

多くの方はシェルター卒業後も関わりが続いています。特にゆりんクリニック受診と訪問看護で転宅後の生活を支えている方が多く、てのほしが新規の相談者への支援、

ゆりんが継続的な支援と分担して車の両輪としてハウジングファースト利用者を支えています。

残念ながらシェルター利用中に失踪または退去された方は5人でした。

アパート探しを始めてももう少しで転宅という時点で失踪した方が三人。その後連絡が取れないので失踪の動機を聞くことができないのですが、定着することへの恐怖心や居心地の悪さ、また住民票を置くことで居場所が知れる恐怖などが背景にあるのかもしれませんが。

隣人トラブルで失踪したと思われる方が一人。

家賃を滞納して話し合いのうえ退去となった方が一人。金銭管理については、生活保護だけでなく年金や就労収入など複数の収入がある方がうまくやりくりができず苦勞す



るケースが見られます。

* そのほか2年契約の恒久的住宅が豊島区で1室。

* 2016年から2年契約で住まわれていた加納久江さん、向後光男さんが亡くなられました。ご冥福をお祈りいたします 清野賢司

→ シェルターから自分のアパートに転宅（引っ越し）した記念に、ピカピカの新居の写真を撮らせてもらいました。

鍼灸班

こんにちは、TENOHASI 鍼灸班です。鍼灸班は雨が降らない限りTENOHASIの炊き出しのある日に東池袋中央公園にてテントを張って、鍼灸・マッサージ・整体をしています。

鍼灸・マッサージ・整体すべてがスタッフ不足で困っていますので、ご興味のある方は是非ご連絡ください。



以下は2022年7月〜2023年5月の11か月の活動報告です。

★先ずお二人の訃報です。

【福島哲也氏】福島さんは2021年6月26日から約1年半に渡りほぼ毎回連続で公園に来て頂き、いつも患者さんと向き合いいろいろな忠告をされながらマッサージをされておられ、患者さんにも評判が良かったのですが、本当に残念です。公園では2022年11月26日が最後となりました。12月10日の公園はお休みの連絡があり、続けて12月12日朝に「一身上の都合により、今後ボランティアに参加できなくなりました。申し訳ありません」とのメールを頂いたのです。その後四丁目院にお預かりしているものをお返しする関係でメールのやり取りをして、12月15日にお預かりしているものをお渡しする予定でしたが、当日来られることが出来なくなつたとお知らせを頂

き、その翌日に亡くなられました。

【小林詔司氏】石崎がとてもお世話になった師の一人ですが、前回の会報誌(43号)のご寄付欄に『コバヤシ ショウジ』と載っているように、TENOHASIの活動を応援して頂いていた方で、積聚会の会長を長らく続けられて来られ、多くの会員や鍼灸学校の学生を指導をされて来られた方です。2022年1月18日に頂いたメールにて、これからも患者さんや会員に紹介したりして応援をしてくださると頂いたのが最後となり、2022年8月に亡くなられました。

★活動実績

- ① 鍼灸班全体 実施回数20回 患者さん延人数280名 (内女性82名)
- 参加スタッフ延人数 90名 (内治療者延人数 64名)

② 内訳

- (1) 整体 実施回数11回 治療者延人数11名 患者さん延人数53名(うち女性15名)
- (2) マッサージ 実施回数11回 治療者延人数12名 患者さん延人数63名(うち女性21名)
- (3) 鍼灸 実施回数18回 治療者延人数41名 患者さん延人数164名(うち女性46名)

(石崎卓)



コラム てのはし働き方改革！

てのはし職員の勤務時間というのは、書類上では決まっているけれど実際には相談や緊急対応で「365日・24時間」となりがちです。

この春、新しい常勤職員が入職したのをきっかけに、勤務時間を設定しなおしました。基本は平日9時半出勤・12時から昼休み・退勤は18時半の8時間勤務。



でも、てのはしは土曜に炊き出しと衣類配布・水曜夜に夜回りがあって、平日に普通に出勤しているとあっという間に残業時間が過労死ライン？に迫ってしまいます。そこで夜回りがある日は遅出し、炊き出しで働いた分は平日の勤務時間を減らすなど細かく調整することにしました。これで残業時間についてはOK。

もう一つの課題は休憩時間です。

事務所にいるといろいろな人がふらっと相談に訪れます。「給付金の書類が届いたんだけど、なに書けばいい?」「今日病院に行ったらこんなこと言われてさ……」等々。

不思議なことに、ほとんどの方はアポなし。昼休みとか関係ありません。これでは休憩にならない!「休憩時間の一斉付与」の原則を守れない!

そこで、事務所の入り口に上のポスターを貼ってみました。みんながこれを見れば、いずれは12時台に来る人はいなくなって、職員はきちんと昼休みが取れるだろうと……



やってみて半年。まったく効果はありませんでした。みんな入口のポスターを見る前にガラス戸の奥を見て、だれかいたら問答無用でガラスを開けてくれます。「あのさあ、幸田さん!大野さん!」。

職員はちょっと引きつりながら、にこやかに食べかけの丼丸またはコウのお弁当を置くのであります……

働き方改革への路は険しい。

あなたはどうして炊き出しボランティアに？

ボランティアアンケート結果

炊き出しボランティアに参加登録をしている人は現在約200人。炊き出しを支えているのはこのメンバーです。

ボランティアのみなさんはどんなきっかけで参加し、どんなことを喜びとして、どんなことに問題を感じているのでしょうか？

2022年12月から翌年にかけてアンケートを取って46人から回答を得ました。

1, 炊き出しに参加した理由は？

・ホームレスの報道を見て何か活動がしたいと思ったから

・親に誘われて、きょうみがあったから。

・ホームレス支援に関わりたいたいと長年、機会を探していた。コロナをきっかけに池袋の活動にふれ、サイトでボランティア参加申請ができることを知ったため参加することができた。



・コロナ禍で困っている人になにかできないかと思った。池袋付近でのボランティアを調べたら、このボランティアが見つかった。

・誰かと接していたいから

・目の前に明らかに困っている人がいるのに、どう声をかけたら良いのか分からず、声をかけたところで何の役にも立てないかもしれないという気持ちもあり、結局何もできず、後悔したから。今はテノハシのチラシとテレカをお守りとして持ち歩いています。声をか

けようか迷った時に背中を押してもらえます。

2, 継続的に参加されている理由は何？

・活動している時間が楽しいです。みんなの関係がフラットで、各々が出来ることをその場に持ち寄って毎回頭続けていっている達成感が好きです。

・ホームレスの方たちの助けになりたい、というよりは、社会貢献できている満足感と、ボランティアの方たちと一緒に活動できる楽しさからです。

・炊き出しで食事を提供することで誰かの役に立っていると思えるから

・テノハシは様々なお手伝いができるので、自分にもできることがあって良かったと思います。

3, 活動を通して感じられたことは？

- ・毎回、活動を継続する重要性を実感する一方で、どうしたら参加人数を減少に転じさせるとできるかと思えます。

- ・経済格差が広がって、多くの人が生活に困窮する恐れがある社会だと実感しています。

- ・関わっておられる方々、並んでおられる方々、皆さんどなたもが、その場所・時間を大切にしていることが感じられ、「一緒にできている」と楽しい。

- ・炊き出しに並んでいる人たちは、自分が日常で、嫌だなあ、変な人だなあと思っている人達が大半であること、私の偏見が社会から追いやられてしまったのかなと、反省するきっかけになりました。

- ・どんどん利用者が増え、終わりがなく感覚になったり、炊き出しはあくまでも対症療法でしかないという無力さを感じることもあるが、それでもないと困る方々がいるということを実感している。

- ・今までは素通りしていましたが、テノハシに関われた事で、自分も一歩踏み込んだ行動が取れるようになりました。

4, てのはしのいいところは？

- ・気軽に参加できる。

- ・支援者に20〜40代の比較的若い世代が多い。

- ・個人で参加される方が多く、テキパキ仕事をして、余計な拘束時間もないので、私には参加しやすいです。

- ・ボランティアは、それぞれ社会への関心や問題意識をもって、忙しい中時間を割いて活動されており、自主的なマインドで参加している。

- ・てのはしの皆様は、並ばれる方々に敬意を持って接しておられますばらしいと思います。

- ・同調圧力があまりなく、風通しがよいところだと感じます。頻繁に参加できなくもそういった参加者に対して排他的ではないところが安心できます。

- ・活動の中でボランティアの皆さんから意見が出ると、運営の方が一方的に決めるのでは無く、丁寧に意見を出し合って合意形成しているところです。

- ・ボランティアに最初に参加する時にレクチャーの時間を設けていただき、理解も深まりありがたかったです。

- ・これだけ大規模に資金を集め、人を集め継続されていることがすごいことだと感じています。一方で、行政の手が届いていないことに複雑な気持ちにもなります。

- ・これが一民間団体が担う活動なのか…と感じることもあります。反対に一民間団体のパワーに圧倒もされます。

5, てのはしの問題点は？

- ・活動歴の長い方が幅をきかせ、上から目線でものを言うことがありますがあります。お互いにボランティアで活動しているので、その人の存在に感謝し、尊重するよいうな言動が求められるのではないのでしょうか。

- ・ハラスメントなどネガティブな事も起きているようですが、詳細な情報はわからないままなので、聞かずにおりました。ボランティアさん同士のトラブルなどもあったようですが、いつの間にか〇〇さんが参加しなくなったりする、ということに不完全燃焼感がありました。

- ・継続性への不安(現在の事務局長に万一のことがあったら組織そのものが維持できるのかおおいに疑問)



新職員自己紹介

大野力

てのはしに入職して9月で半年を迎えます。私がてのはしに入職した経緯、そして簡単な自己紹介をさせていただきます。と思っています。

相談者や関係者の方々とお話をすると「どうしてこの仕

事をしているのですか？」と聞かれる事がよくあります。その時に毎回「これといった感動的なエピソードはないです」とお答えすると皆さん苦笑いしてらっしゃいます。そんな私ですが、数年前にボランティアとして初めて活動に参加した経緯ははっきりして

います。私が中高生の時に毎日のように通っていた池袋駅前は、まだ段ボールやブルーシ

ートで作られた寝床が並んでいました。それが街の一部として当たり前の景色でした。

高校卒業後、私は海外で長く生活していましたが、約十年後にふと池袋を通った時、駅前にあった段ボールハウスや

ブルーシートは一掃されていきました。大型商業施設が増

え、道路が整備され、街としてはより都市を感じさせるようになっていきました。同時に「あ

の時、段ボールハウスから顔だけ出していた人達はどこへ行ったのだろう」「雑誌を何冊も重ねて枕にしていた人は

今どこで寝ているのだろう」そんな疑問を抱きました。日本は路上生活者を生み出さないほど豊かになったのか。私の知らないところでベアシックインカムのような制度が導入されたのか。街の変わり様は見えずに感じるものでしたが、メディアで報じられて

いる生活困窮者数の増減推移よりも、現場を自分の目で見たいと思い、てのはしの活動に参加しました。

てのはしにボランティアとして初めて参加するまで、私は海外の某デパートで販売員として働いていました。当時

大学在学中でしたので、大学と家の往路内で探した結果、通り道のデパートで働くこと

となりました。大学、職場、家（シェアハウス）の3つの場所でのコミュニティが自分

自身の全てだと思っていました。しかし、職場を一步出るとbeggarと呼ばれる生活困

窮者が当たり前のようになっています。腕を掴まれ小銭を求められる事は毎日、車を出せば

信号待ちで勝手に窓ガラスを拭き始め、代金としてお金を要求されました。そこには私の仕事場とは別のコミュニティがあり、そこを通過する私はそのコミュニティに出入りする一員なのだと思っていたのです。そこで、自分の行動範囲内で出会う人は自分の生活の一部であると考えようになりました。後に違いに気づくのですが、私が海外での生活で経験してきたそういった出会いは自分から探し辿り着いたものではなく、既に存在する場所を通りかかっていただけなのだ。それはアプリがあらゆるからやって来ていたからです。

日本へ帰国し、てのはしの炊き出しに初めてボランティアアスタップとして応募し、会場となる公園へ行きました。そこには当日300人以上の方が並んでいました。私が中高生の頃に路上で見かけた方達は、駅前から姿を移したただけで路上生活から脱した訳ではないのではないかと感じま

した。食事や住まい、その他の悩みを抱えながら厳しい環境の中を生き抜いている方達。自分がそこに存在したのです。自分が1つアクションを起こして、現場に身を投じた事で新たに出会ったもので、達成感を感じたのを覚えています。

その後、自主的にボランティアとして継続的に炊き出しに参加するようになって約3年が経ち、炊き出し実施日以外の当事者の様子を知りたいと思うようになりました。月2回の炊き出しでお会いする方に食事をお配りして、次に会うのは2週間後。その間は、どう過ごしているのか、違う形、違うタイミングで関わる方法はないかと模索していました。以前に道で毎日お金を求められたような状況は、ここでは中々出会わない。自分から踏み込んでいかなければ現場すら見ることが出来ない。そういった想いを抱え、「炊き出し以外の活動にも興味がある、仕事として関わり

たい」と伝えました。ボランティアとしてある程度の期間関わらせていただいていたので、改めて自己紹介はしませんでした。フルタイムで関わりたい旨を清野さんに話し、私はてのほしで働くこととなりました。

入職して2週間ほど経ち、炊き出しで相談を受けた方の生活保護申請に同行しました。今まで私が区役所に用があるとすれば、印鑑登録証明や住民票を受け取る時だけでした。初めて相談者と区役所

に行き、「生活保護の申請はどの窓口に行けばいいのだろう」と迷ってしまいました。生活福祉課へ辿りつき、「〇番の部屋へどうぞ」と案内され相談者と一緒にパーテーションで区切られた部屋に入りました。案内された部屋には面接相談員がいて、私が同席する相談者に聞き取りを行いました。「事前に伺っていた情報と相違はないか」「相談員に、本人が不利となるような伝え方はしていないか」「私が同行することで上手く

話が進まないなんて事はないか」と責任を強く感じましたが、申請は無事に受理されました。公的制度に繋がる一局面に立ち会えた事を今でも鮮明に覚えています。そうして初めての生活保護申請同行が終わりました。

人により抱えている問題や求めている事は違って当然だと思えます。そして出会い方も様々です。型に嵌める支援を考えるのではなく、その時々ニーズとペースに合わせた関わり方を精一杯考えられるよう努めていきます。私の短い人生の中の十年間でさえ目に見えて街の変化が見られたのですから、相談される皆さんの状況、考えも日々変化していることと思えます。そして、今この瞬間ではなくとも数年後に改めて出会い、話し、共に歩いて行けるような態勢を持ち続けたいと思います。これからも長い目で見守って下されば幸いです。

大野 力



物資・資金のご寄付ありがとうございました。

2022年7月～2023年7月に物資・資金をご寄付くださった方のお名前を感謝を込めて掲載いたします。（順不同・敬称略）

多くのお名前の中には、いつもの方も、初めての方も。TENOHASIは皆様に支えられています。

*お名前が漏れている方がいらしたら申し訳ありませんが御連絡ください。

個人情報保護のため、ご寄付頂いた方の名簿はweb版では割愛させていただきます。



2022/10/9 この日は 520 食のお弁当を配布出来ました。

皆様のおかげです。

TENOHASI の活動

- 炊き出し & 医療生活相談 & 鍼灸 毎月第2/第4土曜日 東池袋中央公園
- 衣類配布 毎月第1土曜日 東池袋中央公園
- おにぎり配りと夜回り 毎週水曜日 池袋駅前公園～池袋周辺
- ハウジングファースト東京プロジェクト 路上脱出から地域生活定着へ

活動資金のカンパをおねがいします！

郵便振替 00190-8-259686 特定非営利活動法人 TENOHASI

銀行振込 ゆうちょ銀行 019(せいのけい)支店当座 2596686 トクヒ) テノハシ
クレジットカード決済 ホームページからお願いします。

物資カンパ募集中

季節の衣類・靴・カバン・カミソリなど日用品・食品（缶詰・レトルト等）他

*現在、調理ができないのでお米や野菜は募集を停止しています。

*送り先：〒177-0045 練馬区石神井台6-1-28 てのはし

お問い合わせ

メール：TENOHASI ホームページの「お問い合わせ」から

電話：03-6824-5538 事務局

特定非営利活動法人TENOHASI 会報第44号 2023/9/15発行	発送元
<input type="checkbox"/> HP https://tenohasi.org/	〒171-0043
<input type="checkbox"/> メール info@tenohasi.org	豊島区要町1-28-20 マカロニ
<input type="checkbox"/> facebook https://www.facebook.com/tenohasi/	特定非営利活動法人TENOHASI
<input type="checkbox"/> x(twitter) https://twitter.com/tenohasi	TEL 03-6824-5538
印刷 アビーム(社会福祉法人復生あせび会)	

会報誌のWEB版をホームページにアップしています。

*個人情報保護のためWEB版では「ご寄付御礼」ページは削除しています。

「紙の会報誌は送付不要」という方は、お手数ですが上の「お問い合わせ」からご連絡ください。